

ナット: ユウキ、今日はお話を聞かせてくれてありがとう！まず、自己紹介をお願いします。どこ出身で、スノーボードを始めたきっかけは何ですか？

ユウキ: こちらこそありがとう！俺は兵庫出身やねん。大阪の近くで、森とか田舎がいっぱいあるとこ。雪はほとんど降らへんし、山もないけどな。親父がスノーボード好きで、「なんやこれ？」って思ってたけど、説明とか全然してくれなかったんや。ただ小さい人工雪のスキー場に連れて行かれて、そこで初めて滑った。めっちゃ楽しかったんや。

ナット: すごいスタートですね！そこからどうやってスノーボードが上達していったんですか？

ユウキ: 最初はインドアのゲレンデで練習してたんや。日本にはインドアの施設が多いから、夏はそこで滑って、冬は山に行くって感じやった。11歳か12歳くらいの時に、エアバッグジャンプでトリックの練習を始めて、そこで他のライダーとも出会った。撮影したりしてたらスポンサーがついてきて、14歳で日本一の大会に優勝したんや。それが人生の転機やった。そこからRideに誘われて海外の大会に出たり、16歳でレッドブルのスポンサーを受けたりして、19歳でクアッド1980を決めた時は本当に大きな瞬間やったね。

ナット: 驚きのキャリアですね！そんなに成功しているのに、スロープスタイルからバックカントリーに転向した理由は？

ユウキ: 簡単な決断ではなかったね。2020年のBurton US Openで優勝したけど、2021年には招待されへんかったんや。それでオリンピックに行く気もなくなったし、バックカントリーのことを考え始めた。それが自分のスキルとか考え方を大きく変えてくれたね。

競技をやってる時は、自分の将来とか人生のことをあまり考えへんかった。ただ、有名なスノーボーダーにならなアカんって感じで、そこにめっちゃストレスを感じてた。特に日本では完璧な模範を期待されてたから、それが空っぽに感じることもあったんや。年に1000万円くらい稼いでたけど、それだけじゃ幸せにはなれへんかった。バックカントリーでは、名声を追いかけるんじゃなくて、今この瞬間に集中することを学んだんや。

ナット: なるほど。バックカントリーと言えば、コルベットのキングス&クイーンズでは印象的なパフォーマンスを見せてくれましたね。お気に入りの瞬間は何ですか？

ユウキ: キングス&クイーンズは最高やねん。怖い瞬間ほど生きてるって感じるんや。2021年にスイッチバックサイド180を決めた時は嬉しかったし、2022年には2位になった。でも大会だけじゃなく、ライダーたちと1週間過ごしてスタイルを共有するのが楽しいんや。スロープスタイルとは全然違う雰囲気やね。

ナット: 去年の冬はどうでしたか？ハイライトやチャレンジがあれば教えてください。

ユウキ: 去年は良いことも悪いこともあったな。ジャクソンホールでのジャンプセッションが最高の日やった！キャプ9を決めて、めっちゃ気持ちよかった。それとTGRと撮影したのも刺激的やったね。撮影は大会みたいなプレッシャーがあるけど、バックカントリーでは毎日が成長のチャンスや。

ナット: 挑戦の中で、怪我のリハビリから学んだことはありますか？

ユウキ: 初めての大きな怪我で手術も経験したから、学ぶことが多かったな。「知らんなら行かん」ってことを学んだ。自分がやりたいことを信じられへん時は、知らんのと同じや。リスク管理も大事やね。膝の怪我で自分の体にもっと耳を傾けるようになった。これを乗り越えられへんかったら、スノーボードはもう終わりやから、プレッシャーは大きいけど、そのおかげで未来に向けて頑張れてる。

ナット: 若いスノーボーダーへのアドバイスはありますか？

ユウキ: ジャクソンにいるなら、めっちゃラッキーやと思う。バックカントリーでの経験は何より価値がある。天気とか雪質を理解することや、その場の変化に気づくことが大事やね。知識は力や。いい仲間と一緒に楽しんで、常に学び続けてほしい。あと、クリエイティブでいることを忘れんといてな！

ナット: クリエイティビティも重要ですね。どんな影響を受けましたか？

ユウキ: 自分ではクリエイティブやと思わへんけど、常に新しい視点を持つようにしてる。レネ・リネンカンガスみたいなライダーを見ると刺激を受けるよ。

ナット: 最後に、今年の冬に向けての目標や楽しみなことを教えてください。

ユウキ: ジャクソンに移住して、スノーボード業界の中心にいる感じがしてる。ここにはスノーボーダーとして欲しいものが全部揃ってるんや。この街で、自分が誰になりたいのかを考える時間が増えた。「ユウキ・カドノ、スノーボーダー」として、自分に正直に生きたいと思ってる。めっちゃ楽しみや！

ナット: ユウキ、今日はありがとう。今年の冬の活躍を楽しみにしてます！

ユウキ: ありがとう！また山で会おう！